

# 大学生のライフイメージについて：高校生から大学生の変化

著者	丸岡 里香
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要
巻	1
ページ	145-153
発行年	2016
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002189/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002189/</a>

# 大学生のライフイメージについて ～高校生から大学生の変化～

The life image of the university student  
～The change of the university student from a highschool student

丸 岡 里 香  
Rika MARUOKA

## 要旨

近年、高校生を対象とした健康教育時に実施している調査では、若者が結婚や子どもを持つことに前向きなイメージを持てない割合が増えてきている。少子社会を生きる若者を支援するひとつとして将来へのポジティブなイメージを持つことができる健康教育が必要と考え、若者のライフイメージがどのように変化するのかについて高校生から大学生の変化を比較する質問紙調査を行った。その結果、高校生から大学生にかけて結婚や子どもを持つことに積極的なイメージを持つ割合が増えていた。男女別では、月経や妊娠の限界についての知識は男子に正しい知識が伝わっていないことや、高校生の女子の1割が自身の月経についての知識が十分でないことがわかった。また、性感染症や避妊に関して現実的な興味は高校生から大学生にかけて高くなり、学校教育で取り扱われる健康教育の内容についての課題が明らかになった。

キーワード；ライフイメージ 高校生 大学生

## I 緒言

少子高齢化の現状に若者は自身の将来についてどのようなライフイメージを持っているのだろうか。妊娠と結婚の関連が強い日本の中で、初婚年齢、初産年齢が30代となることは妊娠出産の限界があることを理解していないということであるのか、または結婚や子どもを持つことに積極的になれないことなのかと考えられるが、いずれにしても少子社会となることは免れない。若者はそうした社会の中で自分の将来像をポジティブにイメージできるのだろうか。また、学校教育の中で実践される健康教育は心身の健康問題のみならず現代の若者の将来に希望を持つ役割を担うものである事が社会にも個人にも望ましいと考えるが、現行の健康教育はそのニーズにマッチしているのだろうか。

平成25年厚生労働省白書<sup>1)</sup>「若者の意識を探る」によると結婚の現状は少子化による若者人口の減少、晩婚化の背景より2010年の25～30歳にかけての未婚率は74.6%であり、1980年の41.1%と比較すると30ポイント以上の差がある。婚外子の割合が諸外国に比較して極めて低い

我が国では、こうした未婚率の上昇が妊娠・出産の減少に強く影響している現状にある<sup>2)</sup>。また、高等学校養護教諭が健康講座の前後に実施しているアンケートでは、近年性への興味の変化が現れており、思春期の性に関する課題は性感染症や人工妊娠中絶の増加への対策ではなくなってきた。結婚や初産の年齢が30代へとシフトし、少産少子となった現状にこうした変化が影響している現状について、若者は将来にどのような期待をし、結婚や出産に関するプランをどのように描いているのかをとらえなおす必要があると考える。

前掲の調査では18～24歳の若者が結婚に対して「まだ若すぎる」「まだ必要性を感じない」「仕事（学業）に打ち込みたい」と結婚しない選択をしている理由が挙げられている。一方で「卵子の老化」「精子の老化」と言われている様に妊娠に生物学的な限界があることを学校教育の中で伝えてきていない現状がある。「できちゃった婚」と言われる妊娠がきっかけとなっている結婚が25%となり、諸外国と比較して婚外子率が非常に少ない日本において、子どもを持つことと結婚について若者がどのようなイメージを持っているかを知ることによって現代の若者に求められる健康教育を考えることを目的とした。

## Ⅱ 研究目的

若者のライフイメージがどの時期にどのように変化していくのかを知ることによって、今後の健康教育の内容を検討する資料とする。

## Ⅲ 研究方法

調査方法：北海道内の公立高等学校1年生の健康教育の前に行われた「ライフイメージ」に関するアンケートを基に、大学を対象に同じ項目を使用し質問紙調査を実施した。高校への調査を実施した教員より調査の協力と結果の使用の許可をいただき、高校生と大学生の両方の結果を比較した。

対象：北海道内の大学2校の1.2年生であり、講義の中で質問紙を配布し回収した。

期間：2015年3月～10月の講義時間の最後に研究の目的を説明し、その場で配布・回収した。調査に先立ち調査は自由参加であり、不参加の不利益はないことを説明し調査用紙への回答をもって同意とした。

質問項目：男女交際への興味、結婚観、子どもを持ちたいか否か、妊娠・月経の知識、性に関する興味、相談相手等

分析方法：統計ソフトエクセルを使用し、単純集計、クロス集計、 $\chi^2$  二乗検定を行った。

## Ⅳ 結果と考察

高校生は、男子（１年生）51名、女子（１年生）94名の合計145名であり、大学生は男子（２年生）62名、女子（１年生）69名の合計131名であった。

### １．将来の結婚について（図１）

「将来結婚したい」と答えたものは男女とも高校生よりも大学生の割合が高くなっている。特に女子は大学生になって20%以上高くなり、「どちらともいえない」が5分の1になった。一方男子は「結婚したいと思わない」と答えたものも増えており、高校生のときに「どちらともいえない」としていたものが、大学生になって生活の自立を目前にすることで、現実的な考えに移行したものと思われる。国立社会保障・人口問題研究所が行っている「出生動向基本調査」からは9割弱の若者が「いずれ結婚しようと思う」と考えており<sup>1)</sup>、18～24歳の若者の「独身にとどまっている理由」である「まだ若すぎる」「まだ必要性を感じない」「仕事（学業）に打ち込みたい」という理由がこの対象が大学生であることから当てはまるのではないかと考える。三谷ら<sup>3)</sup>は高校生を対象に母性理念尺度による母性意識の形成について報告しているが、高校生の意識の形成は準備段階にあることを示しており、本調査の結果も同様であると考えられる。また、三木ら<sup>4)</sup>は恋愛観・結婚観に関する調査の結果、大学生の女子が恋愛の先に結婚を意識しているのに対し、大学生の男子は結婚を前提としない状態の恋愛を望む傾向にあると述べている。本調査の高校生から大学生の変化も女子の高くなる率に比べ男子の率が低い傾向はこの先行研究と同様の結果であると考えられる。

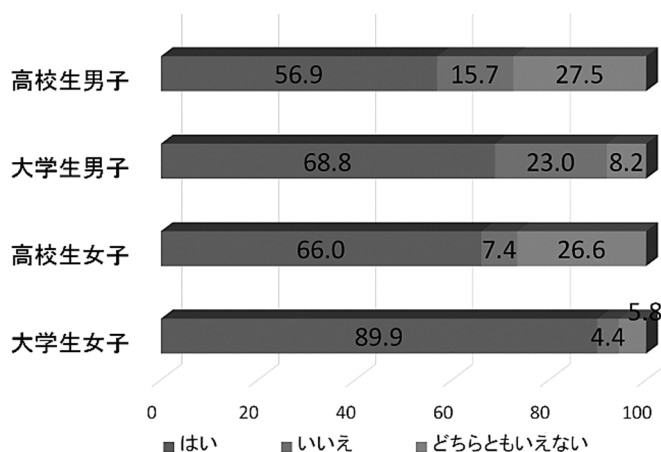


図１ 将来結婚したいと思いますか？

### ２．将来子どもを持つことについて（図２）

将来子どもを持ちたいと思うと答えた割合は男女ともに大学生になって高くなっている。男女別では男子の「子どもをもちたいと思わない」割合が女子の2倍以上であり、大学生になっ

て少なくなる女子とは逆に割合が高くなっている。結婚に対する希望と同様に高校生の時には「どちらともいえない」が3割であったが、大学生ではゼロであり自分の将来が現実的になってきた現われと思われる。呉<sup>5)</sup>による大学生が親になることへのイメージに関するインタビュー調査からは自分の親の子育てをポジティブに意味づけている人は、自分が親になることに関してポジティブになりやすい傾向にあるが、大学生は子育てに「負担感」を抱いているということがいわれており、その負担感が現実的になることで高校生から大学生にかけて男子の結婚や子どもを持つことに否定的に回答する割合が増えることに繋がっているのではないかと考える。

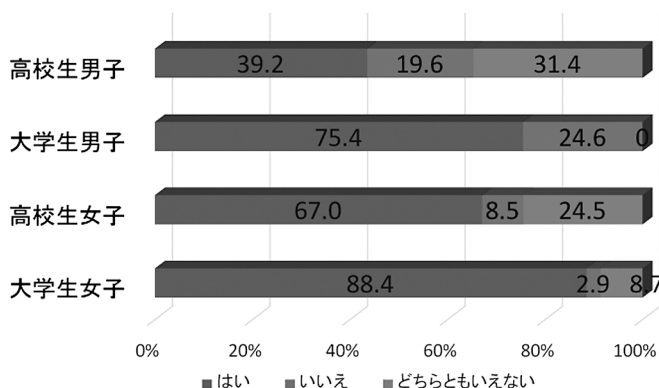


図2 将来子どもを持ちたいと思いますか？

### 3. 月経や妊娠の知識について（図3. 4. 5. 6）

#### 1) 月経について

男女別では40歳前後までと答えた割合が男子で3割みられ、大学生になると50歳前後までと答える割合が増えている。高校生男子の2割が「生きている限り」と答え、大学生になると半分は減少しているが、高校生の女子でも約1割が自身の月経を経験しながら終わりがわからないでいることがわかった。学校教育の中で初経教育は時間を取られていても、女性の生涯にわたる変化については教育に取り入れられていないことから、知識として得る機会が極めて少ない。その結果、自身の変化を理解していない高校生女子の存在は不思議ではないが、母親の年代が更年期をむかえる時期にあることが、大学生になると閉経について理解している割合が高くなることに関連があるのではないかと考えられる。

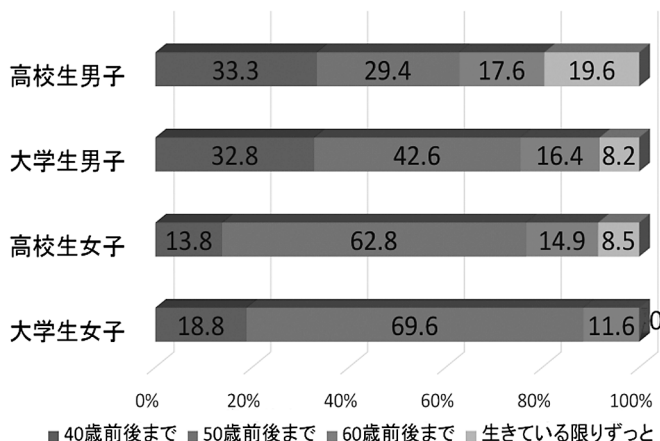


図3 月経は何歳までだと思いますか？

## 2) 妊娠について

妊娠については高校生男子の3割以上が「月経がある限り妊娠できる」と答えている。高校生も大学生も50才前後と答えている割合が男女とも2割から3割であることは、上記の月経の年限と同様に身体の変化について知識が十分とはいえない現状にあると考える。少子化対策の根本的な課題として月経や妊娠の限界についての知識がなりことを問題視することが話題になっているが、こうした結果から教育としてどう取り組むかが課題であると考え。結婚や子どもを持つことは選択の自由ではあるが自分の将来をイメージする中で、月経や妊娠の限界を知らなければライフプランを立てることさえ成り立たなくなることに危機感を持ち、教育の中でできる支援とは何かを考えなければならない時期にあることを示唆している。

こうした知識について、大学生の男子と女子が月経と妊娠の年限を理解しているか否かをクロス集計したところ、女子では生きている限りと答えたものはいなかったが、男子の中で生きている限り月経があると答えたものは妊娠についても月経がある限りと答えたものが多く、有意な差がみられていた。

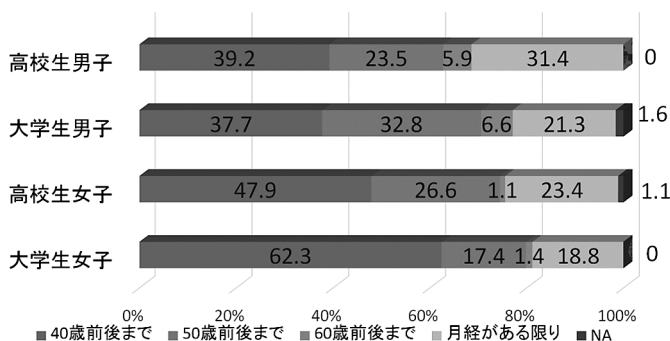


図4 何歳まで妊娠できると思いますか？

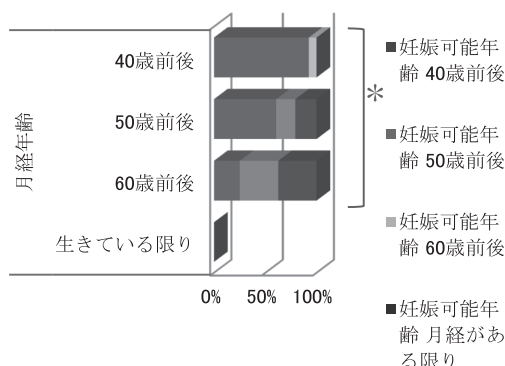


図5 大学生女子の考える年限

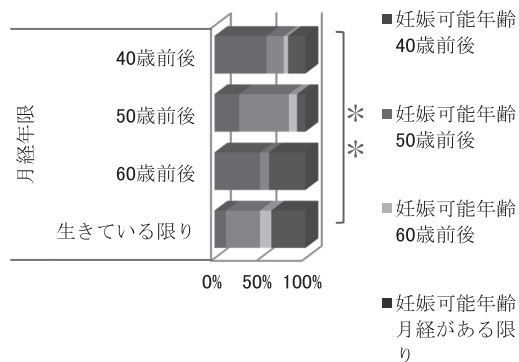


図6 大学生男子の考える年限

#### 4. 避妊や性感染症について

##### 1) 避妊の実行について (図7)

子どもを持つことや結婚ともかかわる避妊について、避妊行動を実行するか否かと実行できるか否かが現れており、高校生と大学生で大きく変化が見られている。高校生では「わからない」と答えるものが男女とも5割弱であり、実際にそのような場面に遭遇している率は大学生よりも低いことが考えられる。一方大学生では男女とも「望むまで避妊する」と答えたものが5割を超えており、「わからない」は大きく減っているが「場合による」というものが2割となり高校生より増えている。性行動が身近になり現実的になることで変化した結果と考えられる。

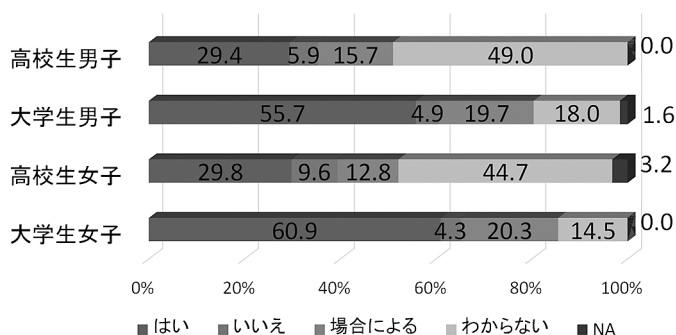


図7 妊娠を望むまで避妊しますか？

##### 2) 性行動や避妊の現実感について (図8. 9)

健康教育の実施前の高校1年生の結果として「いつか役に立つ」「現実味がない」と答えたものが多いが、「身近なこと」と答えた男子の約2割と女子の1割にも注目する必要がある。性に関する健康教育を実施する意義として、現在課題を持つ生徒へ届く支援として必要である。大学生になって「身近なこと」となる割合が大きく増えるが、この時期のために高校生の性の

健康教育は必要といえる。

こうした、表面に出しづらい「性の悩みを誰に相談するか」という質問では、平成13年、平成19年の調査でも一番多いのは「同性の友人」であるが、「母親」という割合が年々増加している。子どもと保護者が「仲が良い」関係性にあると言うのはこの年代の特徴とも考えられる。反対に多くなっているのではないかと予想した「インターネット」は大学生男子が1割を超えるほかは1割弱であった。同性の友人、母親に次いで多かったのは「誰もいない」であり、高校生男子の3人に一人という割合であった。誰もいないと答えたものが月経や妊娠の知識などに他と差がみられるかをクロス集計したが有意な差はみられず、知識がないわけではなく相談すべきことがないなど必ずしも困っているのではないことがわかった。

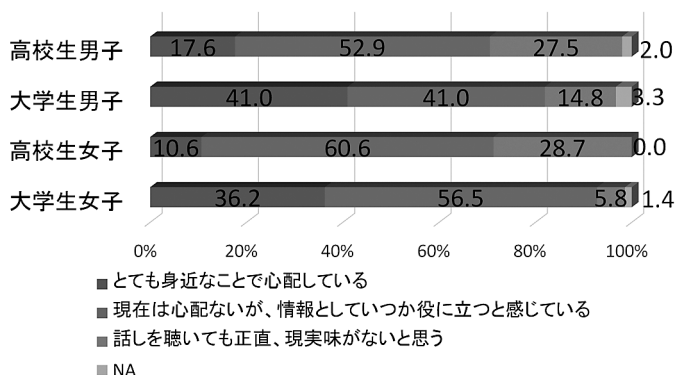


図8 性感染症や避妊をどう感じていますか？

### 性に関する相談相手

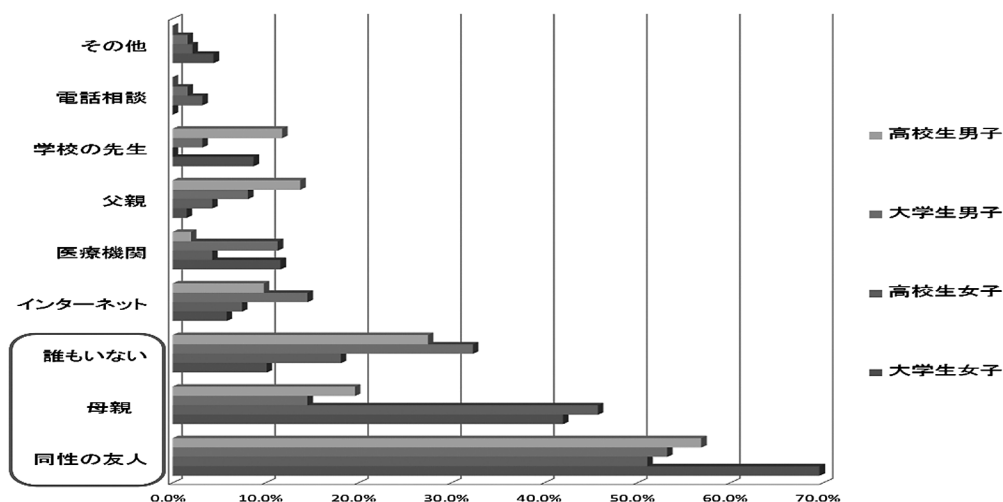


図9 性に関する相談相手



## V まとめ

- 高校生から大学生にかけて結婚や出産に期待が高くなっている状況がみられるものの、男子大学生では結婚や出産に消極的なものが25%程度見られていた。男子大学生における結婚・出産は、先延ばしにされた課題と言える。
- 月経について初経教育は学校教育の中で実施されていても更年期や閉経について伝えられることは当たり前にはされていない現状がある。思春期の変化とともに更年期の変化についても健康教育として取り入れる必要を感じる。そうした生理的な変化が理解されないことと妊娠の先延ばしは関係していると考ええる。
- 月経や妊娠に関する生理学的理解は、やや低い側面も見られるが、避妊に関する意識は大学生で高くなっていたことから、正しい生理学的側面の学習の充実や正しい情報の提供が求められる。
- 高校生では「現実味がない」とされた性感染症や避妊に関しても大学生では「とても身近なことで心配している」という率が高くなることから、セクシャルデビューが大学生で高まると考えると、高校生への正しい情報として知識やスキルの健康教育は必要と考える。
- 少子化対策の根本的課題として妊娠・出産の限界から生涯の月経の変化を理解し他うえて自分のライフイメージを持つことは若者にとって必要であるといえる。

## VI 今後の課題

今回の研究は、高校生と大学生の知識の違いの確認と性行動の現実感や相談相手等を聞いた結果をまとめた。今後将来観や自己認識等も取り入れた調査を行う予定であり結婚や子どもを持つことに影響する因子を探り、これからの健康教育に求められていることを検討する必要がある。

## 謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただいた高校生や大学生と養護教諭の皆様に心より感謝申し上げます。

## 付記

本研究は北翔大学「北方圏学術情報センター研究室」の助成を受けて実施し、本調査の一部は第62回日本学校保健学会にて発表している。

### 【参考文献】

- 1) 厚生労働省白書, 第2章多様化するライフコース第2節結婚に関する意識, pp59-87
- 2) 永井暁子: 若者は, なぜ結婚しないのか, 生活福祉研究, 通巻77号, June 2011, pp 1 -11
- 3) 三谷明美, 赤井由紀子: 高校生の結婚観と母性意識に関する研究 - 性差による比較 -, 山口県立大学看護学部紀要, 第10号, 2006, pp39-43
- 4) 三木幹子, 植木由香: 女性と男性の恋愛観・結婚観に関する意識比較, 広島女学院大学論集, 第61集, Dec, 2011, pp95-112
- 5) 呉宜児, 後藤さゆり, 平岡さつき, 他: 大学生の「結婚すること・親になること」のイメージ, 共愛学園前橋国際大学論集, No.12, pp43-53
- 6) 齊藤幸子, 宮原忍, 内山絢子, 他: 少子社会における成人期への移行に関する母子保健学的研究(3)大学生の恋愛観・将来観に関する調査, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第48集, pp 1 -22